

---

# 彼女の秘密

M u

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

彼女の秘密

### 【コード】

N8972D

### 【作者名】

Mu

### 【あらすじ】

僕は、彼女に告白し、ふたりは両思いだと思った。なのに、どうして彼女は、僕をさけるんだ？彼女の秘密を知ったとき、僕は……  
高校生のちよつとエッチな、でも、純愛物語。春エロス2008参加作品です。

## 前編

僕はドキドキして立っていた。

目の前に女の子が小首を傾げながら、僕を見つめている。

それは、僕のあこがれの女の子だ。

腰まで届く、長い艶やかな髪。くっきりした目元。細くてかわいい眉。

つんとした綺麗な鼻筋と卵形の綺麗な輪郭。そして、透き通るような白い肌。

背はわりと高く、ほっそりとしているのにプロポーションはよくて、まるでどこかのお嬢様のような清楚な容姿をしている。

その少女は、僕の同級生で、同じ水泳部の仲間だ。

今、僕は、その少女に、告白しようとしていた。

高校入学から、早四ヶ月。もうすぐ夏休みが始まる。

その前に、自分の気持ちを彼女に伝えたかった。彼女を好きな気持ち伝えられたかった。

そして、できれば、恋人になれたらいいなあと……。

高校入学で僕らは同じクラスになった。

僕は、一目で彼女のことを気になった。

綺麗でかわいくて、そこにいるだけで花が咲いているようにみえた。

控えめで、普段は言動で目だったりしないけれど、誰かとおしゃべりしながら、笑っている表情は、僕の胸にドキドキする気持ちをもたらしした。

驚いたことに、そんな彼女と同じクラブに入っていた。それは、全くの偶然。

僕が水泳部に入部したときには、彼女もいたんだ。

その偶然が、どんなに嬉しかったか。

僕らは、いつの間にかよく話すようになっていた。  
話題は、クラブのこととか、勉強のこととか、友達のこととか、  
そんなたわいもないこと。

そんなとき、僕の冗談に口元をほころばせて楽しそうに笑う彼女  
を見ていて、僕は、はつきりと、自分の気持ちに気づいた。

彼女のが好きだ。もっと、彼女と一緒にいたい。

だから、僕は彼女を呼びだした。

クラブが終わった後の、プール場の裏手。

「話があるんだけど……」

僕の言葉に、彼女は、素直についてきてくれた。

そして僕は、目の前の彼女を見つめながら、ドキドキする胸の鼓  
動を押さえて話し出した。

「あの……」

「うん、なに？」

彼女が小首を傾げる。その仕草が、たまらなくかわいい。

あ、いや、今は、それより……

「えっと、聞いて。僕は、その、君のことが……」

「わたし？」

僕は、思い切って告げた。

「好きです。とっても、好きです」

なにも2度も言わなくても、と自分で思う。とっても恥ずかしい。

その言葉に、彼女は、しばらくキョトンとした顔をしていた。

僕の胸が痛くなってくる。

彼女は、僕のことどう思ってるんだろう？ たぶん、嫌われてな  
いとは思っけど。

でも、何とも思っていないか？ それはあるかも？

ああ、そしたら、ダメかな？ 告白しない方がよかったかな？

でも、でも……。

なんだかどんどん弱気になってきた。彼女の沈黙が胸にいたい。もう、どうでもいいから、早くなんか、言ってくれよ。そんなふうに思った。

それは、そんな長い時間でなかったかもしれない、でも、僕にはじりじりするほどの時間だった。

彼女は、驚いた表情をおさめると、僕に言った。

「ほんとに？　ほんとに、わたしのことを好きになってくれたの？」  
その表情が、少し照れたように赤く染まってくる。

「うん。そうだよ」

「う、嬉しい！」

目の前で、彼女が両手を頬に当ててそう言った。

嬉しい？　それって、僕が好きでよかったって言うこと？

彼女も、僕のこと好きでいてくれた？

僕は期待で胸が震えた。

「君も、僕を好きでいてくれたの？」

彼女は、はにかんだ表情で、

「……うん」

と小さく答えてくれた。

やったあ！

僕は天にも昇る気持ちになった。

両思いだった！　彼女と！　やった！

小さくガッツポーズまでしてしまう。それから僕は早口で言った。  
「じゃあ、あの、付き合ってくれませんか？」

当然、はいと言ってくれると思った。だって、好き合ってるんだから。

でも、その時急に、彼女は、ハツとしたような表情をして、その顔が曇った。そして、

「あ、あの……ご、ごめんなさい」

「え？」

「わたし、あなたと付き合えない」

何を言われてるのか、理解できなかった。だって、さっき、好きだって……。

「ほんとに、ご、ごめんなさい」

彼女は、ちよつと頭を下げると、逃げるように僕の前から走り去った。

「あっ！」

僕は追いかけることもできなかった。

何がなんだかわからなくて、それさえも考えられなかったんだ。

いったい、どういうことなんだろう？

彼女は、確かに、僕のことを好きだと言ってくれた。

それなのに、付き合おうと言ったとたん、逃げるように帰ってしまった。

なにか、気にさわることも言ってしまったのか？ 僕の態度が

気に入らなかつたのか？

なんだかわからないけれど、彼女を怒らせてしまったのなら、謝ろう。謝って、もう一度、彼女に僕の気持ちを聞いてもらおう。

そう思って、翌日学校に行った。

教室で彼女を見つけて、話しかけようとした。

ところが、僕が近づくより前に、彼女は、すつと、席を立ってどこかにいってしまふ。

ああ、仕方ない。また、後で話しかけよう。

そう思った。

ところが、そんなことが、何回も続いた。

これは……避けられてる。やっぱり、嫌われたのかな？

なんだか、落ち込んできた。

うん。でも、とにかく聞いてもらわなきゃ。僕はそう思った。

でも、彼女には完璧に避けられていて、教室でも、機会があるだろうと期待したクラブでも、彼女をつかまえることは出来なかった。

そんなことが、何日も続いた。

相変わらず、僕は彼女に避けられていた。

最初は、そんなにひどく嫌われたんだと落ち込んだ。

でも、時々、僕が見ていないときに、彼女が僕を見ていることに気づいた。

僕が偶然振り返って彼女を見たときなど、彼女は慌ててそっぽを向くのだ。

その頬がなんだかちよつと赤く染まって見えた。

それは、僕が嫌いだからという態度には、見えなかった。

じゃあ、どうして、避けられてるんだらう？

僕は、あらためてそう思った。

もし、彼女があの時言ったように、僕のことを好きでいてくれるのなら、なぜ、付き合えないって言うんだらう？

たとえば……。

僕の他にも好きな人がいて、二股かけるのがイヤだとか？ ……

いや、彼女が、そんなことするとは思えない。

それなら、無理矢理、誰かの彼女にさせられていて、それで僕と付き合えないとか？ 脅されたりしてるのかもしれない。

僕の想像は、だんだん過激になっていく。

もしかしたら、彼女の家借金があつて、それで、やばいところで働かされていて、それを知られるのがイヤだからとか？ 放課後はいつも身柄を拘束されてるとか？

そんな、あぶない小説だかドラマのようなことまで考えてしまう。

でも、そんなことを考えながら、一つだけわかったことがあつた。もし、彼女がなにかの理由で、困っているのなら、僕がなんとかしてあげたい。

彼女が僕のことを好きでも好きじゃなくても、僕は、彼女が好き

なんだから、彼女の心配を無くしてあげたい。  
僕はそう心に決めた。

明日から夏休みという一学期の終業式の日。  
僕は、相変わらず避けられている彼女に、なんとか先回りしようとした。

ホームルームが終わると同時にそそくさと飛び出した彼女の後を、周りも省みずに、追いかけた。

廊下を突っ切り階段を飛び降りて、下駄箱の前で、走るように逃げ去る彼女の腕を掴んだ。

彼女が驚いたように振り返る。その頬が少し赤い。

「どうしても、君と話がしたい！　お願い、逃げないで！」

僕は彼女の腕を掴みながら、頭を下げた。彼女の腕の震えが伝わってくる。

「……………どうして？」

久しぶりに聞く、彼女の声。僕の胸が熱くなった。

顔をあげてみた彼女の表情は、困惑に彩られている。でも、僕は言った。

「君が僕を避けているのは、わかってる。僕のことを嫌いになったのかもしれない。でも、お願いだから、理由を教えてください！　頼むよ！」

彼女の視線が揺れて、表情が苦しそうに変わる。

「……………ち、違うの。あなたを嫌いになったわけじゃないよ」

「じゃあ、なんで？　もし、他にもっと好きなやつがいるんなら、はつきり言って。僕はあきらめる」

「違う。違う」

彼女が首を激しく振った。

「それとも、誰かに脅されてる？　なんか、困った事情がある？　それなら、僕は、君を守りたい。だから、教えてくれ！」

彼女は、僕のそんな捨て身の言葉を聞いて、しばらく震えながら俯いていた。

それから、顔をあげると、静かな声で僕に言った。

「……付いてきてくれる？」

「え？」

「ふたりだけのところで、話したい」

「……うん」

そうして、僕は、屋上に向かった。

## 後編

終業式の午後の屋上には誰もいなかった。

夏の空が、青くひろがって、白い雲が気持ちよさそうに浮かんでいる。

校庭で活動する運動部の掛け声が、小さく聞こえていた。

彼女は、屋上を先に進んでいくと、金網の柵の手前で立ち止まって、僕の方を振り返った。

その表情が思い詰めたように見えた。

僕はさらに近づこうとして、

「そこで、止まって」

という彼女の言葉で立ち止まった。

彼女まで、まだ2メートルぐらい離れている。大切な話をするには、ちょっと遠い気がした。

「ここで？」

「うん。そこで」

でも、彼女にそう言われたら、動けなかった。

彼女は、なんだか震えているようで、見ていて苦しくなってくる。

「あの……大丈夫？」

「う、うん。大丈夫」

とても、そうは見えなかった。

こんなに苦しそうなのに、無理に言わせることはないのかな？  
そんな気がしてくる。

彼女をこんな苦しくさせるぐらいなら、僕が我慢すればいいことだ。これじゃ、本末転倒だ。

「あの、もう……」

言わなくて、いいよ。と言おうとしたとき、彼女が言った。

「お願い、聞いて。わたしのことを、見て」

そうやって、彼女が僕を見つめた。その瞳がはつきりと決意を告げている。

「わたしのほんとうのことを、教えるわ。わたしが、あなたと付き合えない理由。だから、見て」

彼女の言い方が少し引つかかる。

ほんとうのことを、“見”て？ 何を、見るんだ？

そう思う僕の前で、彼女が両手で自分のスカートの裾を掴んだ。

綺麗な腿が覗くミニのスカート。その裾を、彼女がそろそろ引き上げていく。

「え？」

なにを？ と思った。 なにをしてるんだ、彼女は？

そんな事したら、スカートの中が見えちゃうじゃないか？ 子供のスカートめくりじゃないんだから……。

僕は、ドキドキして、目を逸らした。

でも、彼女の顔を見ると、恥ずかしいからか、僕から視線を外し、真っ赤な頬をしながら、それでも唇をかみしめている。

その表情が、僕によっぽどの覚悟だとわからせる。

そんなに彼女が覚悟してるのなら、ちゃんと見なきゃ。

僕は再びそろそろとあがっていくスカートの中を見た。

なんだろう？ なにかあるんだろう？

もしかして、事故とかで、大きな傷跡があるのかな？

それとも、火傷の痕がひどいとか？

もっと単純に大きな痣があって、それが恥ずかしいからとか？

えっと、なんだろう？

次第に露わになっていく彼女の太腿の奥に、僕はドキドキしながら、でも目を逸らさずにいた。

白い腿が眼にいたい。

もうすぐ、パンティーが見えちゃうんじゃないかと思って、さす

がに目を逸らしたくなかった。

でも、その時……逆に、視線を逸らせなくなった。

僕の視線の先に、彼女の綺麗な下腹が見えていた。

白い腿の上、股の間には、黒い茂みが露わになっている。

彼女は……パンティーを着けていなかった。

え？ え？ なんだ？ どうして、彼女が、こんな？

頭が混乱して、思わず口から、言葉がでた。

「どうして、はいてないんだ？」

彼女が、ビクツと体を震わした。

あ、しまった。そんなこと、口に出すんじゃない。

彼女の顔は、ビククリするほど赤く染まっている。

きつと死ぬほど恥ずかしいんだ。

それで、思い当たる。

きつと誰かにやらされてるんだ！

彼女に、こんな、恥ずかしいことさせるなんて、いったい誰だ？！

怒りの感情が湧きだした。

「もういい！ もういいから、スカート下げて！ 君に、こんな事

させるやつ、僕が許さない！」

僕がそう言うと、彼女は、視線を僕に向けて、真っ赤に染まった

顔で言った。

「うっん。そうじゃないの。そうじゃない！」

「え？」

彼女の答えがわからなかった。

そうじゃないって、どういうことだ？

その間も、彼女はスカートを降ろそうとしない。彼女のあそこが

僕には丸見えだった。

「違うの。誰かにやらされてるわけじゃないの」

「でも、そんなに恥ずかしそうで……」

「うん。そうなの。恥ずかしい。恥ずかしいけど、わたし……これ

が、好きなの」

震える声で、彼女はそう言った。

僕は、呆気にとられて声も出なかった。

これが好き？ 恥ずかしいけれど。恥ずかしいから？ 好き？  
それって……

「そう。そうなの。わたし、露出好きなの。こんな格好で、学校に  
きてるの。こんな格好が、気持ち良いの。だから……」

彼女の体が小刻みに揺れていた。顔が上気して、息が苦しそうだ  
った。

「……あなたと付き合うことなんか出来ない。こんなわたし、あな  
たは嫌いになっちゃう！ こんな、変態なわたし……」

そこまで言っつて、彼女がいきなりがくつと膝を折った。そのまま  
倒れそうに傾いた。

僕は慌てて彼女に駆け寄る。

無我夢中で彼女の背中に腕をまわした。

そのままなんとか座り込んで倒れる彼女を受け止める。

僕の両腕の中に、彼女の柔らかい体が横たわった。

「あつ、あうつ、ううん」

腕の中で彼女が何度か動いた。まるで小さく痙攣しているみたい  
だった。

彼女のスカートが捲れ上がったままになっていて、彼女の茂みと  
白いその部分が、間近に見えた。

うわあ、と思っつて、慌てて手でスカートの裾を下ろした。

腕の中でようやく彼女が眼を開けた。

真っ赤な顔はそのまま、ハア、ハア、と息をする度に、腕の中  
で彼女の胸が上下した。

「えっと、あの……だ、大丈夫？」

僕の言葉に、彼女は一瞬僕を見て、それから顔を横向けた。そし

て言う。

「あ、ありがとう。抱えてくれて。でも……わたしのこと、嫌いになっちゃったよね。こんなわたしのこと……」

僕は、なんていったらいいのかわからなかった。

あまり突然のことに、頭が回らない。

「わたし、わたし、イツちゃった。あなたに見られて、イツちゃったの。は、恥ずかしい……」

彼女は頬に手を当てて顔を隠した。

「こ、こんな恥ずかしい子、こんな、変態、イヤだよね？」

そう言って、肩をふるわせた。

僕は、彼女の体を抱えながら、思った。

あんまり突然で、あんまり驚きで、すぐにはよくわからなかったけど、これって、僕が思っていたことと比べて、どうなんだろう？

彼女は、僕以外の誰かを好きだったわけじゃなかった。

誰かに無理矢理脅されてるわけでもなかった。

まして、借金の形で困ってるわけでもない。

それに、なにより、彼女は、僕のことを好きだと言ってくれていい。

それ以上に、大切なことがあるか？

そりゃあ、彼女のこと、ちよつと驚いたけど……今も、驚いてるけど、でも、僕は……。

僕は顔を覆って腕の中で震えている彼女に声を掛けた。

「あのさ、僕は、君が好きだよ」

「え？」

被っていた手はずして、彼女が僕を見た。その瞳に光るものが浮かんでいる。

「でも、でも、もう……」

「ううん。嫌いになんかなってない。君のことが、好き」

「でも、だって、わたし、こんななのに……」

「関係ないよ。そりゃあ、ちよつと、ビックリしたけどさ」

「いいの？ こんなわたしで、いいの？」

「もちろんだよ。それに……」

僕は、ちよつと恥ずかしくなる。

「好きな女の子がエッチなのを、男がイヤなわけないじゃないか！」

僕の頬が恥ずかしさで熱くなった。彼女の瞳から涙の雫が落ちる。

「……嬉しい！」

彼女は突然僕の背中に腕をまわし、僕を引っ張った。

僕の唇が彼女のそれでふさがれる。

それは僕の初めてのキス。女の子とのファーストキス。

それが、こんなに甘いものなんて、僕は初めて知った。

\*

\*

そのあとの、彼女との露出の数々や、初体験は、またいつか話そう。

僕らはふたりとも、あのころよりずっと好きになった。身も心も

一緒になったんだ。

ねえ、君、愛してるよ。

これからもずっと、ドキドキしようね。

おわり

## 後編（後書き）

春エロス2008企画で

『18禁ぎりぎりのエロスを！』  
ということでしたが……すみません、力不足です。  
でも、わたしには、これがぎりぎり（笑）

春エロス企画終了しました。

読んでいただいた方、投票していただいた方、ありがとうございました。  
いました。

続編を書きました。

『彼女の秘密2』です  
よろしかったら、読んでみてください。

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

### PDF小説ネット発足にあたって

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8972d/>

---

彼女の秘密

2009年6月23日00時38分発行